

詩時評

第24回

その詩に骨はあるか

松本衆司

京都の妙心寺涅槃堂には妻方のご先祖の供養にと年に数度訪う。先日、広大な境内をゆつくりと散策していて、塔頭の一つ靈雲院の門の階横に西田幾多郎墓所と刻まれた石碑を見出した。随分ぼんやりしていたものだ、と今まで知らずにいた不勉強なわが身を恥じ、とその西田幾多郎の書いた文章の一節に云ふのくだりがある。「私は屢若い人々に云ふのであるが、偉大な思想家の書を読むには、その人の骨といふ様なものを掴まねばならない。そして多少とも自分がそれを使用し得る様にならなければならぬ。偉大な思想家には必ず骨といふ様なものがある。大なる彫刻家に鑿の骨、大なる画家には筆の骨があると同様である。骨のない様な思想家の書は読むに足

らない。顔真卿の書を学ぶと云つても、字を形を真似するのではない。」（「読書」より）その「骨」のある「偉大な思想家」の西田幾多郎の墓には自筆で「寸心」と刻まれていた。控え目にして強い意志と理解したい。

彼末れい子詩集『オウムガイの月』（風来舎）を読む。タイトル詩の「オウムガイの月」を引く。

オウムガイの／螺旋状に並ぶ空気部屋の数は三十もあるが／化石でみつかるとオウムガイでは／たった九部屋しかない／四十六億年前の地球では／一か月は九日だったらしい／一日の長さは五時間で／潮は絶え間なく満ち引きし／両手で抱えられるほどの大きさの／輝く月がぬつと地平に／昇っては沈み 昇っては沈み していた／五百万年前には／アフリカの地で／人類の赤ん坊が満月をつかもうとして／思わず立ち上がったいた／いまも 毎年三センチほど／月は地球から遠ざかりつつある／それに／つれて／地球の自転も 月の公転も／だんだんゆつくりになり／一日の長さは やがて千時間を越えてしまい／生命に流れる時間も／ゴム紐のように引きのばされていくだろう／月の明るい夜／熱帯魚たちはいつものように／オウムガイの部屋をつついてノ

ックしている／オウムガイは月の動きを記憶に刻んでいる／わたしも／ゆつくり首からペンダントを外し／手のひらにのせて／青いトルコ石に月光浴をさせる

この詩集は、ご自身の二十歳からの人生を十年毎に刻んで六冊目の詩集となるそうだ。旺盛な好奇心に導かれた豊かな知識と生きる知恵と情が満載の彼末れい子の詩はどれを読んでもおもしろい。まるで、お聞きなさいとばかりに耳元で熱心に語られているような感じで、描かれた詩的現実の世界に引き込まれていく。

倉田茂詩集『旅支度まで——注のある詩集』を読む。「珈琲の本」を引く。

珈琲の本を書いている。あくまで自分用の一冊を。／書かれるのは味ではない。私が呼び出すのは、珈琲を飲み始めたころのその店の街のたざまい。聴いていたクラシック。読んでいた本。迷いがまだ新鮮だったその時代。自分を旅人とまだ気づかなかったその時代。呼び出した時間につき合う時間というものがいつから流れ始めたかは知らない。その遠い始原から今へと、とどまることなく延びている時間という道を振り返り、ある一点に意識を集中すれば、い

つ時代のことであれそれが「現在」であると吉田健一は言う。拠って立つ今は空白となつてしまふ。／日に一度私は空白を体験する。街の雑踏を通り抜け、行きつけの珈琲店に一人まぎれ込むとき。ゆっくり息を吸い息を吐き出す。それから自分の二十歳を呼び出し、二十五歳を呼び出す。／過去は戻らないが真実であり得るだろう。人は結局、二十代に志したことを幾つになつても志すものなのだ。二十代に好きだったことが一番好きなのだ。／眠りにつく日、私は母なる珈琲店の扉を開けに行く。そこは一九五〇年代。新潟市は古町通。行き交う人々は会釈を交し戦後がまだ輝いていた街。それから私は重い扉を閉めて、まっすぐすすんで消えてゆく。／珈琲の本が完成する。私という時間が止まる。

失礼ながら、略歴に一九三三年新潟生まれとある。高齢の詩人が描き出す一篇の詩に心が揺れる。長い旅の途上の折々の思念が堆積し、凜として立つ詩人の確かさ、或いは真実の人としての発想の奥行きに魅せられる。年輪の豊かさに尊さがある。

吉原維子詩集『一万回目のおはよう』を読む。「秋へ渡る九月」を引く。

日陰に立ち 空を見上げる／勢いよく流れて来た夏が／ゆつたりとした秋とぶつかり／秋をのみ込み／まじりあい こそれあい／それでも混ざりきれない熱が雲を呼ぶ／庭の隅の桜の木のでつぺんには／ひっつかかったまんまの夏が／一匹残つて鳴いているあぶら蟬を／愛おしく抱いている／やがて全ての音が消え／雲は広がりが／いつものように夕立を連れて来るけれど／真っ直ぐに注がれる雨糸は／葉陰の小さな椽の実に／遠くふくよかな重みにしなる稲穂の上に／優しく当たつて落ちていくのだろう／／軒先にかかる枝から 少し色づいた桜の葉が一枚／しつとりと舞いながら落ちていくのを合図に／雨は上がり／再び満ちる陽ざし ひなた道／昨日まで眩しく影を引いていた時間が／落ち着いて明度を落として夕暮れになる／守られるように／秋へ渡る／九月

目の前の現象とその向こうにある大切なものを結ぶ、そんなふうな暮らしの風景を愛おしく見つめ、いのちの営みを写すことは詩人の尊い仕事である。この詩集は吉原維子という確かな詩人の眼と心でさりげなくお洒落に、そしていいいきと描かれた作品群だ。

津田真理子詩集『森のフクロウ』かあさ

んへ」(濔標)を読む。あとがきに「私にとつての母は、親子であり、きょうだいであり、友だちであり……」とある。望ましい親子関係をお作りになられた。「森のフクロウ」を引く。

母は満で百歳 猫は人間にしたら百歳／二頭立てで我が家を率いる／母は森のフクロウ 森の動物たちは／巷のホコリをまき散らし しゃべりまくる／目を閉じ黙つて聞く母 表現の仕様ねと一言／空間は澄み あたりは和む 百年の時の重み／猫にとつて母は仲間／正座して母を出迎える やさしい眼で見上げる／母は猫に言う あなたは何の介護も不要ね／道の向こうに弟の車／手を振る私 その瞬間 母は／フッと歩み 仰向けに転倒／無事だったのは 奇跡／／命は命がけ ねえフクロウさん

「無事だったのは 奇跡」、百歳の「母」の人生そのものへの言葉のように読者には伝わる。生老病死、四苦八苦の人生の折々の出来事をさぞや誠実に受けとめ、生き抜かれたのである。まさに母の人生への頌歌である。

森田美千代詩集『片道切符の季節』を読む。「今日をくぐり」を引く。

陽だまりの手に／柔らかな空間がつつまれ
る／樹は／彩った葉と別れ／手のひらほどの
表皮が／ぱっくりと剥がれている／指の
隙間から空に向かって透けている／閉め
ても 閉めても／抜けていく意志を靴底に
秘め／冬の影／足元に残して立つ／葉の
重み／枝からはなれてさみしくないかい／
白く乾いた土をつかんで／真っ直ぐ立ち統
ける陽射しはうなずくこともせず／傍らで
じつと風を受けている／／確実に朽ちてい
く／行き場のない熱を包み／今を刻んでい
く

あるがまま自然はそこにあり、あるがまま
人もそこにある。大震災を経験され、生きる
ことを見つめ続けてこられた詩人の心である。
一枚の葉と一人の人、その意志も心も速い時
間と繋がりがら「熱を包み／今を刻んでい
く」。そのあるがままの存在の調和が美しい。
詩集読後の収穫である。

高橋馨詩集『それゆく日々よ』（洪水企画）
を読む。「木の骨」を引く。

コトバはすべてこじつけに過ぎない／と思
うことがある／根こじして炎を得るように
／コトバが出てこない／煙がただよつても

／／あたりにはだが見あたらない／／（闇
牢のフアリア神父に／ほだはいらない／古
びたシャツの紙／魚の骨がペン先、／煤と
恵みのワインで書かれた／巖窟王の物語）
／／ペン先が紙を突き抜けて／机に刺さる
ような／コトバが欲しい／木に骨と書いて
ほだと読む／骨の木では火は灯らない／い
まだに暗闇の中／／手探りで木の骨を探し
ている／／誰かが耳元でささやく／——
それは静寂のうちにひっそりとたたずむ—
—／Power dwells apart in its tranquility
＊最後の英語の一節は、シェリーの詩「モ
ンブラン」の終章から。

高橋馨の作品に長く親しんできた。この詩
人の瞑想的詩篇や物語に幾度も心を誘われ、
インナートリップした。まさに集中の詩にあ
るように「アブストラクトな散歩」である。
その抽象の妙はシェリーの詩の如く、静けさ
のなかで超然としている。

足立悦男著「大空放哉」（今井出版）を読む。
『みなんごあんの春』に続く尾崎放哉を描い
た小説である。「天下茶屋」の冒頭を引く。

天王寺駅に降り立った立原夕子は、空を見
上げた。／夕子は青空をうつしたなスカイ
ブルーの鞆を肩から提げていた。／市内電

車に乗り換えて阿倍野の天下茶屋で降りた。
地図を頼りに歩いていると、古い町並みの
閑静な自由宅地に出る。探していた家は住
宅街の中にあつて、こじんまりとした瀟洒
な家屋であつた。門をくぐると女性が迎え
てくれた。小倉まさ子である。台所仕事の
途中だったらしい。エプロン姿のよく似合
う、気さくな感じの主婦という印象だった。
この女性から、放哉の新たな物語を引き出
してみたい。夕子の取材の目的だった。／
廊下を渡るときガラス窓が開け放たれてい
て、庭木の沈丁花の甘い匂いが流れてきた。
この花を詠んだ放哉の俳句のあつたことを
思い出した。／沈丁花の匂ひ夜中思ひ出し
てゐる／南郷庵で亡くなる一月ほど前の俳
句である。放哉は早春の花、沈丁花の匂い
を感じながら、夜中何を思ひ出していたの
であらうか。（略）

女性記者夕子が放哉ゆかりの人を訪ね、取
材するという体で、小説は綴られている。足
立悦男がそこに描こうとしたのは、現実世界
に生きることから追い詰められ、自由律俳句
という詩文芸に生きる真実を求めた、等身大
の放哉の詩と人生である。

服部誕詩集「息の重さあるいはコトバ五
態」（書肆山田）を読む。「カイツカイビキの

「繁る坂道」を引く。

高台の団地から遙かに見下ろす駅への近道は狭くて急な石段の坂道／その途中に地面にめりこむように屋根が崩れ落ちた廃屋がある／何年も前から誰も住まなくなつて打ち捨てられた荒れ放題の古家は外壁に蔦が這いのほり／庭には一面にドクダミが生い茂り／もとは生垣だつたカイヅカイブキは剪定もされずに忘れられていた／均された廣の平地に建つ団地の住民たちは／山ぎわに沿つて大きく迂回する駅までの路線バスの経路を嫌がつて／自転車さえ通れない険しい勾配の小径を朝夕に弛まず上り下りした／来る日も来る日も止むことのない往來は石段の中ほどを丸く窪ませ／山林を伐採して開発された人工の街の記憶を堆く積もらせてゆく／人間の手によって園芸用に改良された品種であるカイヅカイブキは／ピヤクシンと呼ばれた野生種の時代へと容易く先祖返りをする／眠つていた遺伝形質が顕われて針のように尖つた葉先は鋭く伸張し／枝叢は誰からも顧みられずただ繁るにまかせたままうねり枉がつて／日当たりの良い傾斜地で日に日に巻き上がり奔放に育つて天を衝く／野生に戻つた柏槿は石段の急坂を往き來する人たちの好奇の眼から／棄てられた陋屋の団欒の跡を遮り苦

も無く覆い隠した／深緑色の炎は螺旋状に振れながら狭い坂道へと勝手気儘にはみ出し／山上に暮らし続ける人間たちの石を組んで坂を拵えた知恵と工夫を／遠からず焼き尽くしてしまふに違いない

服部誕の詩で優れて評価できるところは描写力だが、その描写する力は対象を知る故に成立する。その対象とは自然であり、人間であり、孤独である。私は密かに或る明治の作家を愛読するが、それも右の理由による。

桑田窓「52時70分まで待つて」（思潮社）を読む。「春風のカレンダー」を引く。

はじめて雪を見る朝／空を見上げ／高い雲に手を伸ばすだろう／これが最後の夜ならば／いつも使つた食器に向かい／お礼の言葉を伝えたい／自ら咲いて 自ら枯れる／そうしてできた／墓標のない花の靈園／窓から見える庭の中央に／パンくずを置いて／すずめが啄みに來るのを／ひとりと眺めている／庭の隅の白樫の梢で／生まれればかりの風が／賑やかに食事する／すずめたちに届いたら／季節はもう春だ／鳥たちは羽ばたく／私も旅立ちのときだ

「時」と対話する詩人の心がしみじみと伝

わつてくる。「時」は単なる一日二十四時間の社会的な時間ではなく、「時」にはどこまでも個人的な「時の世界」がある。それは魂に根ざした世界であり、桑田窓の仕事もまたそこにこそある。

遠野魔ほる詩集「夜更けの椅子」（思潮社）を読む。「置き土産」を引く。

窓辺に小さな椅子をおいたら／通りすがりの雲が／雨粒になつてすわりに來た／風が花びらを一枚／小鳥が音符をいくつか落として／椅子は小さくタツプを踏んだ／夕焼けに染まつた窓／家に帰りそびれた子供が泣いて／椅子もそつと涙を吸い込んだ／夜更け／月がすわつて空を眺めていた／青白くひんやりした光の水たまり／泣きぬけりした影を残して／わたしは窓辺をはなれた／うしろでふいに誰かが／ため息をついた

「私は詩に於て否定されねばならない」とは、明治生まれの著名な詩人の言葉だ。実は詩人たちはここで格闘し、葛藤しなければならぬ。自らの感情生活に根ざした詩をどこまで突き放し、また引き寄せせるか。その作業の結実としてこの詩は高く評価されて良い。